

# 巨人プレヴィンの魅力

～ジャズ・映画・作曲—その創造的沃野

山野雄大



2007年9月定期Aプロ(9月8、9日・NHKホール)モーツァルト《ピアノ協奏曲第24番》を弾き振りしたプレヴィン。「2007年 最も心に残ったN響コンサート—ベスト・ツリスト」にも輝いた

プレヴィンが発表したあるアルバムのライナーノートに、こんな文章がある。彼は(当時首席指揮者を務めていた)ロサンゼルス・フィルハーモニックでチャイコフスキーの《交響曲第6番「悲愴」》を振って、翌晩は室内楽のコンサートにピアニストとして出演、プロコフィエフの《チェロ・ソナタ》にメンデルスゾーンの《ピアノ三重奏曲第1番》を弾き、48時間後には街の他のホールでこのレコードを録音した……。



「After Hours」プレヴィン(p.)、ジョー・パス(g.)、レイ・ブラウン(b.)／初盤1989年発売

このレコードとは「アフター・アワーズ」(1989)のことだが、プレヴィンはここでジャズ・トリオのピ

アノを弾いている。1993年の初客演以来たびたびN響の指揮台に立って素晴らしい名演の数々を残してきた指揮界の巨匠プレヴィンは、ごく若い頃から優れたジャズ・ピアニストとして数多くのアルバムを発表してきた人でもある。

もちろんクラシックのピアニストとしても極めて優れた存在であり、2007年9月のN響定期(モーツァルト・プログラム)で披露した協奏曲の弾き振りを感銘深く覚えていらっしゃる方も多かろう。室内楽奏者としての活躍も盛ん、はたまたN響でも自作を披露しているように、大作オペラから小品まで数々の作品を創り続けている作曲家でもある。

さらに遡れば、指揮者として世界的名声を得る前はハリウッド映画界でも作・編曲

家、音楽監督として大活躍……と幅広い才能をそれぞれのジャンルで生かし究めてきた。いずれのジャンルにおいても一流の成果を残してきたのは驚くべきだが、この巨大な音楽家が、この9月から首席客演指揮者に着任、N響との絆をいよいよ深める。今年80歳を迎えていよいよ衰えを知らぬその途方もない多彩／多才を、この機会に駆け足で振り返っておこう。

## 【ウエスト・コースト・ジャズの俊才として】

プレヴィンは1929年ベルリン生まれ、ロシア系ユダヤ人だったためナチス・ドイツの迫害を避けて1938年に一家でパリへ脱出、そこからアメリカのロサンゼルスへ亡命した。既に幼くして楽才を発揮していた彼は、少年時代からジャズ・ピアニストとして注目を集める一方、早くから映画音楽の世界にも飛び込んでいる（ロサンゼルスといえば映画産業の中心地・ハリウッドがある街だ）。

1950～60年代、そのロサンゼルスを中心とするアメリカ西海岸で盛んだった〈ウエスト・コースト・ジャズ〉の歴史をのぞくと、プレヴィンの名は必ず登場する。白人寄りのクール・ジャズを発展させ理知的でアレンジの豊かな傾向を軸としたウエスト・コースト・ジャズの軸となるミュージシャンたちに、アカデミックな音楽教育を受けた白人演奏家が多かった、とはよく指摘されるどころだが、アメリカには戦禍を避けて亡命してきたヨーロッパの音楽家が多く、西海岸にもプレヴィンが作曲を師事したカステルヌオーヴォ・テデスコ（彼はハリウッド映画音楽界でも大活躍した）をはじめストラヴィンスキーやシェーンベルク、

クルシネックなどをはじめ優れた作曲家たちが居を構え、教壇に立ったりしていた。自然に、教師たちのもとからクラシック音楽以外で活躍する門下生も現れるわけだ。

折から、不景気に見舞われた東海岸を離れたミュージシャンたちが、朝鮮戦争による軍需景気もあって活気を帯びていたロサンゼルスなどへ流れ込み、地元ハリウッドの映画音楽界にも人材が供給される。と、多くの要因が重なって西海岸の音楽は隆盛をみるようになった（映画撮影に適したロサンゼルスらしい地中海性気候は、ウエスト・コースト・ジャズの性格にも少なからぬ影響を与えているだろう）。

そんななか、プレヴィンはジャズ、クラシック両面でずば抜けた俊才ぶりを発揮した。ジャズや映画音楽のほか名匠ピエール・モントゥーに指揮を師事。楽才に磨きをかけながら、プレヴィンの名は早くも高まってゆく。

## 【ハリウッド、ジャズ、若き日の活躍】

プレヴィンはミュージカル映画「キス・ミー・ケイト」（1953）やジーン・ケリーのダンス映画「舞踏への招待（1954）、「恋の手ほどき」（1958）、「ボーギーとベス」（1959）、「マイ・



「MY FAIR LADY」  
シェリー・マン（ds.）、  
プレヴィン（p.）、リロ  
イ・ヴィネガー（b.）/  
初盤1956年発売

フェア・レディ」（1964）をはじめ多くの映画に作編曲や音楽監督などとして参加する。1960年にはビート・ジュネレーションの代表的作家ジャック・ケルアックの小説による映画「地下街の住人」（1960）



「WEST SIDE STORY」プレヴィン (p.)、シェリー・マン (ds.)、レッド・ミッチェル (b.) / 初盤のジャケットを用いた国内盤がこの6月にユニバーサル インターナショナルから再販されている。初盤1959年発売

で音楽監督をつとめ、ウエスト・コースト・ジャズのミュージシャンたちを多く起用してそのサントラ盤も話題になった。

ジャズ・ピアニストとしても数々のアルバムを発表、代表盤の数々は今でも聴くことができるので機会があったらぜひお楽しみいただきたいが、シェリー・マン (ドラムス)らと組んだトリオでミュージカル作品のジャズ・ヴァージョンをアルバム化した「マイ・フェア・レディ」(1956)はとりわけ大ヒット、続く「ウエスト・サイド・ストーリー」(1959)でもバーンスタインの原曲を鮮やかなタッチで彩り響かせた。ジャズ史に残る名盤として知られるアンドレ・プレヴィン・トリオ「キング・サイズ」(1958)で披露した華やかなまでのピアノ・テクニクをはじめ、歌手・女優として一世を風靡したドリス・デイとの「デュエット」(1962)など、活躍はとまらない。

## 【クラシック界での猛進、ジャズとの長い縁】

しかし、プレヴィンはやがてクラシック界でも大いに必要とされる存在となり、ジャズ界の表舞台からは遠ざかる。とはいえもちろん、彼のなかからジャズを消し去ることなど不可能以前にそんな必要もなかったに違いないけれど。既に1962年にはセントルイス交響楽団で指揮デビューを果たしていたプレヴィンは1967年から同響の音楽監督に、1968年には名門ロンドン交響楽団の首席



「ANDRE PREVIN'S MUSIC NIGHT 2」1970年代BBCで放送されたプレヴィン指揮ロンドン交響楽団による人気音楽番組「アンドレ・プレヴィンのミュージック・ナイト」で演奏され好評を博した曲による名曲集第2弾 / 初盤1976年発売 / グリンカ《ルスランとリュドミラ》序曲、バーバー《弦楽のためのアダージョ》、J.シュトラウスⅡ《皇帝円舞曲》他収録



「IT'S A BREEZE」イツァーク・パールマン (vn.)、プレヴィン (p.) / 初盤1980発売 / 共演：ジム・ホール (g.)、シェリー・マン (ds.)、レッド・ミッチェル (b.)



「Uptown」プレヴィン (p.)、マンデル・ロウ (g.)、レイ・ブラウン (b.) / 初盤1990年発売

指揮者に着任。ジャズ・映画音楽界での名声のみならず指揮者としての緻密で洗練された手腕を発揮してコンサートホールに多くの若者たちをも呼び寄せた。英国BBC放送はプレヴィンとロンドン響によるテレビ番組「アンドレ・プレヴィンのミュージック・ナイト」をスタートさせて大人気、彼らの残した数々の名レコード(これがまたよく売れた)と共に、指揮者・ピアニスト・解説者としての彼の活躍はクラシック音楽の裾野を大いに広げたのだった。

以降の指揮者としての活躍は詳しくご紹介するに及ばないだろう。世界の名門オーケストラほとんどすべての指揮台に立ち、莫大な数のレコーディングを行い……。

その彼が久々にジャズ・ピアニストとしての顔をみせたのが、ヴァイオリニストのイツァーク・パールマンがジャズに挑戦した



2枚のアルバム「チョコレート・アプリコット」「イツ・ア・ブリーズ」(1980)。ジャズ界での盟友たちと共演したこの録音に続いて、四半世紀ぶりのジャズ新譜となったのが、最初にご紹介したピアノ・トリオ盤「アフター・アワーズ」(1989)。

続いて「アップタウン」(1990)「オールド・フレンズ」(1991)と快活に語るピアノの美しい音色も変わらず耳を惹きつけるアルバムを発表、米テラーク・レーベルではこの時期ジャズとクラシックの両部門でプレヴィンが録音しているという賑やかさだった。ジャンルを自在に往来するプレヴィンが、その広大を愉しげに磨きあげるような日々だった。

## 【作曲家として、 円熟の指揮者として】

さらに近年とりわけその評価を高めているのが、作曲家としての活躍だろう。N響定期で自作自演に接したかたも多いと思うので、豊かな音のパレットに鋭いセンスとリズム感をひらく、優れて親しみやすい作風はお馴染みのはずだ。

サンフランシスコ・オペラの委嘱で書かれ1998年に世界初演された初のオペラ《欲望という名の電車》が、故・若杉弘の指揮で東京室内歌劇場が日本初演(2003)されて好評を博したのをご覧になったかたもおられよう。ニューオーリンズ・ジャズを一切使わずに南部の空気感を醸し出し、物語の深淵をひらき得た傑作だった。

他にも、演奏機会の多い《ピアノ、オーボエ、ファゴットのためのトリオ》など室内楽から、パトルら名歌手たちのための歌曲集、アッシュケナージのためのピアノ協奏曲、ヨーヨー・マのためのチェロ・ソナタ、はたまた(プレヴィンが楽員たちから深い敬愛を捧げられる)ウィーン・フィルのためのオーケストラ曲……など作品は多数。元妻で今も多く共演するムターのためにはヴァイオリン協奏曲やヴァイオリンとコントラバスのための二重協奏曲など多くの曲を書き、ヴァイオリンとヴィオラのための二重協奏曲も初演されたばかり。

そして、この10月のN響定期でも、昨年10月に自らポストン響を振って初演したばかりの新作《オウルズ》が日本初演される。広大肥沃な音楽的感性と豊饒な経験から紡がれる、決して耳をいじめずしかし飽かせない、心の躍動を呼びさますその音楽を、名匠自身の指揮で聴けるのを楽しみにしようではないか。

プレヴィン自身のホームページ(www.andre-previn.com)を覗くと最近の演奏会予定なども掲載されているのだが、新作発表が続々と行われるほか、名門オーケストラを振り、ジャズ・コンサートに出れば室内楽のピアニストをつとめ……と、本稿冒頭でご紹介したエピソードから20年を経て、ますます多忙を増したうえに活躍が世界規模へと広がっていることに、感嘆の思いを新たにすばかり。この意欲旺盛なる名匠がN響と築いてゆく新たな深い縁、逃さずに聴いてゆきたい。

(やまの・たけひろ 音楽評論家)